

《研究ノート》

銅直勇教授の社会学 (4)

——「社会」概念の考察を中心に (後)——

高 島 秀 樹

目 次

はじめに

1. 銅直勇教授の経歴と業績

(1) 銅直勇教授の経歴

(2) 銅直勇教授の業績

2. 銅直勇教授の社会学

(1) 社会学の概念

(2) 社会現象とは何か

(3) 社会学の方法

—一般的とはどのようなことか—

(4) 社会学の構造

(5) 純正社会学の諸問題

(6) 銅直勇教授の社会学の位置づけ

—米田博士の社会学との関係を中心に— [以上 (1)]

3. 高田保馬博士との社会・社会現象の本質に関する論争

(1) 論争の経過

(2) 高田保馬博士の社会・社会現象の本質に関する学説

—『社会学原理』から—

(3) 銅直勇教授の問題提起

—「新著紹介 社会学原理 高田保馬著」から—

(4) 高田保馬博士の再説

—『社会関係の研究』から—

1) 『社会関係の研究』第2章の構成と基本的視点

2) 社会の本質としての「望まれたる共同生存」

3) 銅直勇教授の問題提起に対する自説の提示

(5) 銅直勇教授の社会・社会現象の本質に関する学説

1) 「社会の概念」論文における社会・社会現象の概念

2) 『純正社会学概論』における社会・社会現象の概念

3) 銅直勇教授の社会と社会の本質に関する学説 [以上 (2)]

4. 「社会」概念の考察

(1) 銅直勇教授における「社会」概念の考察

- 1) 本論考の研究目的
- 2) 銅直勇教授における「社会」概念の考察の目的と方法

(2) 「中国に於ける『社会』の意義」論文における考察

- 1) 中国古典に見る「社会」の用例
- 2) 「社」の意義
- 3) 「会」と「社会」の意義

(3) 『社会』続考」論文における考察

- 1) 「社」の原義とその意味の転化
- 2) 「社会」の原義とその意味の転化
- 3) 中間的存在としての「義倉社倉」
- 4) society の訳語としての「社会」の妥当性

(4) 「社会」概念についての検討 [以上 (3) 前稿]

(5) societas の概念と近世「社会」概念の考察 [以下 本稿]

- 1) societas/society 概念研究の目的
- 2) 「社会概念の市民的系譜」論文における考察
- 3) 「近世社会概念の成立序説—社会概念の原初形態—」論文における考察
- 4) 「ローマ時代における社会societas概念の成立」論文における考察

(6) societasの概念と近世「社会」概念についての検討

- 1) 先行研究との関連
- 2) 銅直教授の societas 概念と近世「社会」概念についての研究

おわりに

(5) societas の概念と近世「社会」概念の考察

銅直勇教授は前稿4. (1) 1) で記したように、「社会」概念について二方面から歴史的考察を加えていた。その1は、明治以降、日本に社会学・社会概念が導入されて以来 society の訳語として用いられてきた「社会」という用語の原義を中国の古典に求めて明らかにし、それが訳語として適切か否かを検討する研究である。その2は、西欧における society という用語・概念の原義をローマ時代の societas、universitas から考察し、その上で近世における「社会」概念の成立とその後の市民的系譜を

明らかにする研究である。前稿においては、その1. として記した「社会」という用語の原義を中国の古典に求めて明らかにし、訳語としての適否を検討する研究について取り上げた。これに引き続いて、societas、universitas の概念と近世「社会」概念について明らかにし、さらにこれらの概念間の異同を明らかにする研究について、本稿、4. (5) 以下では取り上げる。この部分についての主な考察素材は下記の3論文である。

「社会概念の市民的系譜」(『社会学論叢』創刊号、1953年11月、所収)

「近世社会概念の成立序説—社会概念の原初

形態一」(『日本大学創立七十周年記念論文集』1960年11月、所収)

「ローマ時代における社会societas概念の成立」(『現代社会と社会学(日本大学社会学科五十周年記念論文集)』1972年1月、所収)

はじめに、この3論文の発表順に従って、各論文の内容を検討していく。

1) societas/society 概念研究の目的

銅直教授が societas、universitas の概念と society 概念(近世「社会」概念)について明らかにし、さらにこれらの概念間の異同、展開の過程を明らかにする研究の成果として、最も早く1953年11月に日本大学社会学科の研究誌『社会学論叢』創刊号に発表した論文が「社会概念の市民的系譜」論文である。この論文は、論文に付記されたように、銅直教授が1953(昭和28)年6月5日(金)の関東社会学会第1回大会(於:横浜市立大学)において発表した内容を基礎として執筆されたものである。

銅直教授は、初めに「…(略)…Society, Societe という語がラテン語の Societas から来ていることも、社会学書の第一頁に見えていところで、今更めて申す必要もないことゝ思う。然るにこのソキエタスなるものは、ローマ法に於て諸成契約の一種をなすものであって、この契約なるものがまた近世社会の特質を表すものであるということ、かの有名なメインの『身分制から契約制^(ママ)え』という法則の中にも表明されている。…(略)…又近世社会思想史に於て社会なる概念が如何にして国家概念から分離するに至ったかについてその研究も既に学者によって発表されている。勿論今日社会学上の一般概念としての社会なるものは、必ずしも右に述べたような或る特殊な社会形態のみ指すものではない。吾々は今かような学界既知の知識について無用の言を重ねようとするものではない。」⁽¹⁾と、当時の先行研究の進展状況についての認識を示している。その上で、自らの研究目的を「ただ与えられたこの制限の範囲内に於て私の述べようとするところは、本来このソキエタスなるものが如何なる性質のものであり、又何故にそれが市民社会的概念として今日一般に使用さるゝに至ったかということである。即ち私はこの社会概念の市民的系譜について以下少しく系図調べをして見たいと思うのであります。」⁽²⁾と示している。

後に発表される2論文も合せて、今日の時点で見直すならば、ここに示された研究の目的はその後も持続されるものであり、3論文に共通する基礎的な研究目的であると理解される。この大きな研究目的の下で、この第1論文「社会概念の市民的系譜」ではローマ時代の societas 概念の研究が中心となっており、その後の近世にいたる社会概念の歴史的展開の検討は紙数の制約もあってか、概観にとどまると言わざるを得ない。第2論文「近世社会概念の成立序説」ではローマ時代に発し、中世を経て近世にいたる社会概念の展開過程がさらに詳しく研究されている。第3論文「ローマ時代における社会 societas 概念の成立」ではローマ時代の思想家 M.T.Cicero (B. C. 106~B. C. 43) の提示した概念を中心にローマ時代における社会 societas 概念を研究するとともに、近世以降の社会の特質を明らかにしてその異同を研究している。このように第1論文であるこの論文の冒頭で示された研究目的は、銅直教授にとってはその後も継続して持ち続けられた大きな研究目的であり、それを以後の各論文で各々の焦点を設定して順次研究を進めてきたと理解できる。

2) 「社会概念の市民的系譜」論文における考察

銅直教授は、「社会概念の市民的系譜」論文の冒頭で societas の原義をローマ法上の概念

に求めて、「元来 Societas なるものはローマ法に於ては債権契約の一種としての出資組合であって、英語の Partnership に当るものである。」⁽³⁾ ととらえ、特に Societas の集合体としての特質、集合体としての Societas と構成員たる各個人との関係について「…(略)…資本を結合した一の目的結合であって、その組合仲間が Socii と呼ばれた。ソキエタスの特徴はその契約によって成立した結合が法律上の人格を形成することなく、権利義務が組員各員に属していたことである。…(略)…ソキエタスなるものはかような性質のものであるから独立の単一体を成しているものではなかった。組員 Socii という語は英語の Companion という意味をもっているとしても、それは法的に言えば集合名詞として用いられているに過ぎないのである。各の組員はあくまでも夫々独立の主體性をもち権利義務の主體者としてその契約に参加しているのである。かようにソキエタスなるものは個人がその主體性を完全に保持しつつ、自己の意思と損益とに於て、自由に他の人々と物的関係を各平等対等の資格に於て——物の権利の前には凡ての人は平等である——締結し又分離すること、かゝる特性があり、又かような性格を有する近世社会の発達によって、ローマ法的なソキエタスの系譜をつぐ社会 Societe という語が近代社会そのものを表現するものとして今日一般に使用されるに至ったと思うのである。」⁽⁴⁾ と説明している。ここに早くも、societas には、独立した権利・義務の主体としての個人という存在と、その主体的判断に基づく結合によって成立する社会と言う近世以降の、さらに近代的な社会の概念と共通する特質が存在すること、それ故、societas の系譜を継ぐ societe という語が近世以降の「社会」を表現するものとなったと言うことを示している。

銅直教授は、さらに societas の特徴を明ら

かにするために、ローマ法における他の集団概念である universitas について検討を加えているが、そこでは「このユニヴェルシタスという語は本来或るものゝ全體を表示するものであった。即ちこのユニヴェルシタスなるものは法律上の人格として認められ、その所属員各自の人格を吸収し、その成員に対して恰も第三者の如く対立するものである。」⁽⁵⁾、「たゞ明瞭にしておきたいことは、ユニヴェルシタスはソキエタスと異り、社団そのものが法人格であり権利義務の主體者であって、その個々の成員とは別個の一の独立の存在として個人はその全體に吸収されていたことである。」⁽⁶⁾ という集合体としての性格の違い、集団の中における個人の位置づけの違いを強調している。

ローマ時代、ローマ法上、第一義的には「…(略)…夫々独立の主體としての若干の個人の間に、一定の利益的目的のために成立した平等なる——少くとも物的権利の前に於て——市民間の自由な私法的な債権契約…(略)…」⁽⁷⁾ ととらえられていた societas 概念であるが、「然しローマ時代に於てもソキエタスという語は、前述のような法律上の用語として債権的な意味に用いられたばかりではなく、既にもっとひろい意味に用いられている。ストア派の学者によってそれは自然法的に理論づけられ、その社会理論の上に重要な意義をもっているのである。セネカによればソキエタスは自然によって与えられた本性によって作られた人間の結合であり、国家その他の制度はむしろ人間の偶然的な産物としてソキエタスと区別されているのである。」⁽⁸⁾ と、ローマ時代においてもこの概念は多義的に用いられていた点への注意を喚起している。この societas 概念にストア学派の学者がどのような意味内容を含意させていたのか、またその代表的学者の一人 Seneca が societas 概念をどのように理解していたかは、societas 概念の近

世社会概念への展開過程を明らかにする上で重要な点であるが、ここでは十分論述されておらず、第2論文以下で考察されることになる。

societas 概念の歴史的展開については、銅直教授は「事実このローマ法的なソキエタスに端を発してコンメンダ Commenda なる出資組合が発達し、それが商品経済、貨幣経済の発展とともに漸次欧米各地にひろがっていった。」⁽⁹⁾と、まず societas 概念の発展形態もしくは発展概念ともいべき commenda に注目し、それが時代を経て、経済活動が活発化するとともに、中世の実態へと変化してきた状況を「ただしローマ時代に於てはソキエタスはローマ古来の共同社会の地盤の上に行われたものであって、ローマ国家が愈々世界社会的性格を帯びるに従って、市民社会的要素も次第に発達して行ったと思われる。然しかゝる市民社会的な人間結合の要素がローマ社会の社会組織そのものゝ中に矛盾対立を生ぜしめたとはいへない。然るに中世に及んで都市及び市民階級が発達し、ソキエタスはコンメンダ等の形式による商業活動資本活動が盛になるにつれ、それは次第に中世社会の実態に変貌を生ぜずには居なかった。… (略) …然し中世社会は純然たる血縁的身分を基礎とする古代的共同社会から庶民的な近代的ゲゼルシャフト^(マフ)へ転化する中間的段階を示すものである。吾々はそれを独逸に於ける Gesellschaft という語の起源のうちにも知ることが出来ると思う。」⁽¹⁰⁾と示している。

ここにいたって、銅直教授は近代的な社会のあり方を示すものとしての Gesellschaft 概念、そこにいたる中間的 (= 中世的) 概念、さらにその起源としての Gesellschaft の原義を明らかにすることの必要性を示しているのであるが、それらの諸点については「元来ドイツ語の Geselle 職人は、古代独乙語の Gilsaljo から生じている。Sal は家、即ちギルサルジョはその

語義としては、同じ家に住居する同居者をいう。… (略) …彼等とその主人の間には積極的な雇傭契約が成立して居り、同時にその反面に於て身分的な忠勤契約と家族的な主従関係が存在していたのである。即ち、主従関係は一面近代的な共同社会的性質をもって居ると同時に、近代への志向を意味するソキエタスの性質を含み、かゝる人間関係の一面から市民社会的観念としての Gessellschaft なるものが発展するに至ったと見る事が出来ると思う。」⁽¹¹⁾と説明している。

このように societas 概念に合わせて、Gesellschaft 概念の古代から中世、近世への展開状況について明らかにした上で、考察は研究目的の中心ともいべき中世から近世、近代へと進められる。まず、中世の人間の生活に注目して「思うに中世から近世にかけて人間の生活集団として三つの大きな形態があった。それは国家と教会と都市又は市民社会とである。」⁽¹²⁾と3種の集団生活の場があり、「この三者の消長が中世以降現代に至る西洋史の主要なポイントであると申してよいだろう。」⁽¹³⁾と三者の相互関係の展開結果が来るべき近世社会・近代社会のあり方を規定するものとなることを鋭く指摘している。その展開過程は実際には「そして市民社会の発展とは、即ち都市を中心としているいろいろのソキエタスの活動が活発に起り、あらゆる人間関係がソキエタス化することによって外ならない。その極かゝるソキエタス的な市民関係が国家と対立矛盾を生ずるに至り、或は市民階級が政治社会の主権を握るに至って、これ等の市民的諸関係の総合態としての社会 Societe Gessellschaft なる概念が確立するに至ったといつてよい。」⁽¹⁴⁾ととらえている。すなわち、中世から近世、近代へと時代が下がるにつれ、歴史的事実として、societas 的性格に基づく市民社会が三者の中で最も有力となり、

国家や教会よりも上位に位置し、よりすぐれた力を持つようになってきたという歴史的事実、歴史認識を示している。

元来、ローマ時代におけるローマ法上の *societas* が「…(略)…個人と個人とが特定の目的利益のための自由なる結合であって、その結合に於ては各個人の主體性又は独立性は毫も失われず、その結合が極めて一面的限定的であって、その形成によって、その成員たる個人の独立性を吸収することのないものである。」⁽¹⁵⁾ という性格を持っていたところから、「かゝる性格の正しい系譜をうけて、自由平等独立なる市民が自己のインタレストによって、その限られた範囲に於ける一面的部分的関係を形成する綜合関係態としての近世市民階級的な社会概念が展開したものと考える。」⁽¹⁶⁾、「ローマ法に於けるユニヴェルシタスが近世社会概念の起源とならずして *Societas* が *Societe* の母胎となったには深い根拠があったのである。」⁽¹⁷⁾ と結論づけている。

このように銅直教授は、独立した権利・義務の主体としての個人の存在を認め、その主体的判断に基づく結合によって成立し、参加する個人の主体性を失わせしめないという特質を持つ *societas*こそが、近世以降の、さらに近代的な社会の概念に共通し、それ故、*societas* の系譜を継ぐ *societe* という語が近世以降の「社会」そのものを表現するものとなったことは妥当であると判断されることを結論としている。しかし、これまで3回にわたって考察を加えてきて筆者が理解した銅直教授の考え方によれば、近代的な社会といえどもこうした *societas* 的な性格、*Gesellschaft* 的な性格のみならず、*universitas* 的な性格、すなわち *Gemeinschaft* 的な性格も有していることを合わせて考えていたと推測される。この点に関しては、論文の最後を「然しソシエテがかように万人が万人を敵

とする社会、凡てが凡てを自己欲求の対象とする利益の社会であるとするならば、社会は常に不満と不安と動揺の巷たるに止るであろう。コムトも亦国家の外に社会を発見したが、然し彼の求むる社会はソキエタス的なそれではなくして、むしろそのユニヴェルシタス的な社会であったのである。」⁽¹⁸⁾ との文章で締め括っており、銅直教授の社会に対する基本的な考え方がどのようなものであったかが十分理解することができるまとめとなっている。

以上、第1論文「社会概念の市民的系譜」における *societas* 概念の研究と、その後の近世にいたる社会概念の歴史的展開の概観的検討結果について、順を追って明らかにしてきた。この論文はA5判6頁、400字詰め原稿用紙15枚程度のきわめて限られた紙数でまとめられており、個々の論点の全てについて十分に検討が加えられ、論述されているとはいえない点も残るが、*societas* から近世社会に及ぶ各概念は明確に示されており、その歴史的展開過程についても簡潔な中にも要点は明確に示されている。この項目のはじめの研究の目的を示した部分に記したように、銅直教授の継続される研究目的に対する基礎的な考え方、その骨格はこの第1論文に示されているのであり、ここに示された基礎的な考え方に基づいて、第2論文以下において個別の具体的な中心的論点を設定しての研究が展開されてきたと理解することができる。

3) 「近世社会概念の成立序説－社会概念の原初形態－」論文における考察

銅直教授は第1論文「社会概念の市民的系譜」を発表してから7年後にあたる1960年11月に『日本大学創立七十周年記念論文集』に、続稿ともいえるべき第2論文「近世社会概念の成立序説－社会概念の原初形態－」を発表した。

この論文では、はじめに今日の社会概念の成立に関して、「我々もまた今日の社会概念が市民社会の発展とその自覚によって確立したという見解をとるのであり、これに異論はない。」との一般的な理解と、それへの賛同を明らかにした上で、「しかしこのことは余りに一義的に単純に考えてはならない。即ちそれが発生し発達した歴史に溯る時は、それは市民社会の成立よりも古い時期において種々なる形相的概念的發展をなし、次いで市民社会の発展とともに、それがその初めからもっている商業的或は市民的特質をいよいよ益々顕著に發揮したのである。」⁽¹⁹⁾と示される歴史的展開過程をふまえて、この論文の研究目的は「然らばこの society, société 及び Gesellschaft なる概念は、もと如何なるものとして発生し発展し成立したのであろうか。またそれが成立するには如何なる歴史的社会的基盤が必要であったか。問題は極めて広範であるが、私はこの序説において、特にその発生的原初形態と、それと相連続している現代社会の特質を述べ、これをもってこの問題の研究の出発点としたい。」⁽²⁰⁾と示されている。第1論文においては、社会 society の原義がローマ時代の *societas* にあること、それが妥当であると言う点については明らかにされているものの、前述のように紙数の制約もあってか、その間の歴史的展開過程に関しては、必ずしも銅直教授が意図した検討が十分に行われているとは言い難いと考えざるをえない。そうした点を補うものとして、あるいは第1論文において研究対象とした時代以降の状況について継時的に研究を展開していくものとして、このような研究目的が設定されたことは極めて妥当であると理解することができる。

このような研究目的、問題意識を持って出発した第2論文における検討は、近世社会、近代社会の特質を明らかにすることから出発する。

銅直教授は「然るに近代民主主義の社会においては、人は各行為の主体者として相対し、これ等自由なる人間の合意による条件的結合が——即ち契約という一語をもって要約することの出来る諸関係が、あらゆる社会関係を顕著に特質づけているのである。」⁽²¹⁾と古代社会、中世社会とは異なる近世以降の社会、特に近代社会の最も基礎的な特質を「契約」に求めている。契約が成立するために必要な前提的な要件については、「凡そ合意の契約というものは、契約当事者が自由に意思し自由に行動する主体的個人として存在することを前提とし、又その契約当事者は夫々独立平等なる人格たることを要件としている。」⁽²²⁾と示している。そして、この近代社会の基礎的特質は近世社会に起源を持ち、近世社会の成立と密接な関係を持つと考えられるのであるが、まさにそこに焦点をあてて、銅直教授は第2論文において「我々が今近世社会概念の成立に溯る時、この契約なるものが、その歴史的成立と如何に本質的に又密接な関係をもっているかを知るのである。我々は次に先づ社会概念の原初形態を明らかにし、更にこれをそれが密接な連関を有する社会的歴史的発展の上に述べたい。」⁽²³⁾と、前述の研究目的の下で、より具体的に解明すべき中心課題を示している。

銅直教授は *societas* について、「メートランドのいうように society 並に société はもとラテン語の *societas* から生じたものである。従って社会概念の起源を知ろうとするためには、初めにこの *societas* が如何なるものであったかを明らかにしなければならない。蓋し *societas* は後述のように既にローマ時代において広い意味にも使用されていたのであるが、その最も特質的な使用は、ローマ法における法律用法として見出されるのである。蓋しこの法律概念は単

なる抽象概念とし今日死語となっているのではなく、ローマ帝国の商業主義の発展に伴って、資本活動の有効な形式として活躍し、当時の国家及び社会経済の上に、大きな役割を演じたのみでなく、この資本結合の形式は、近世の資本主義経済の本質的な規定となっているのである。」⁽²⁴⁾と、その基本的意味、内容を示している。その上で、ローマ時代における *societas* についても、ローマ法上に規定された理解のみならず、異なった理解が存在したことを「彼(L.Seneca=筆者補)のいうソキエタスはローマ法上のソキエタスの如き債権的契約的なものと違って、もっと一般的人間的結合として、即ち今日我々のいう社会という意味に略々近い意味に用いられていることが分かる。さらに注意を要することは彼が *societas* について人間の結合体とその社会性との二つの形相を見ていたことである。一は人間の本性による自由なる相互的奉仕のための結合、そしてその結合は閉ざされたものではなく、開かれた人類的な普遍的結合として、第二は人間の本性から生じた一般的な社会性として、即ちこの二つの面が彼れのストア的自然法的思想にみちびかれて、ソキエタスの中に含まれているのである。」⁽²⁵⁾と示している。前論文においてはL.Seneca(B.C.5~A.D.40 不詳)の所論については十分検討が加えられていなかったが、ここではL.Senecaの所論の内容に立ち入っての検討が行われており、特にL.Senecaが*societas*概念の中に一般的な人間的結合の意味を見出し、さらにその中に個人間の自由な結合と人間の一般的な社会性の2側面が含まれているととらえていたことが明らかにされている。こうしたL.Senecaの*societas*概念は、今日の*society*概念と共通するものであり、*societas*と今日の社会概念との共通性を認める一根據と銅直教授が考えていたと理解される⁽²⁶⁾。

次に、銅直教授はドイツ語の社会(*Gesellschaft*)の語義に考察を転ずる。そして「*Geselle*はもと中世ドイツにおける職人を意味し、*Gesellschaft*はその組合を意味するものであった。その語源は古高地ドイツ語の *Gilsaljo* である。sal は家又は部屋の意味であり、*Gilsaljo* とは一つの家に共に住んでいる人、即ち同居者の意味であった。…(略)…この *Geselle* はまだブルジョワの資格をもたぬ職人仲間のことであったのである。しかもこれも亦都市の手工業者である点において、市民的起源のものであるとってよい。」⁽²⁷⁾と、その起源からして *Gesellschaft* 概念が中世起源のものと考えられることと、その当時この言葉が持っていた意味について明らかにしている。

銅直教授は *society* と *Gesellschaft* は発生の時期や背景を異にし、内容も異にしているが、いずれも近世市民社会の特質と重要な関連を持っており、近代社会概念の起源をなしているとしながらも「就中近世社会の特質と直接重要な関係を有するのは *societas* である。」として、「ソキエタスは本来人格を有せず、それは個々の組合員の集合名詞にすぎないのであったが、中世の終りに至る以前において次第にその意義を拡張し、法人的団体組織を有するものも *society*, *société* 中に包含するに至り、又それは法律的経済的概念から政治学概念中に入りこむようになったのである。然しその語源的特質はなおその後引きつづき長く保持せられて現代社会の中に生き、そしてその性格を規定している。…(略)…かような特質からして、自由平等にして各々主体的なる市民が、自己の意のままに、その欲する特殊のインテレストを目的として、その限られた範囲において部分的条件的なる相互関係を結ぶ、かような諸関係の総合的関連態として、このソキエタスなるものが近世市民社会の意味に発展することは、極めて自然の

ことといわねばならぬ。」⁽²⁸⁾と結論づけている。すなわち、自由平等で主体的な個人の結合としての「社会」、「近世市民社会」の特質が、中世期の *societas* 概念に見られると指摘しているのである。

このように *societas* が市民社会的性格を有していたのに対して、同じローマ起源の *universitas* 概念については、全体的統一的集団概念であり、不可分の全一体としてそこに所属する個人に主体性と権利を与えなかったと考えられ、それゆえ個人主義的な近世市民社会を表示する一般概念として不適当であったと結論づけている。中世から近世にかけての人間の生活集団として、国家、教会、都市または市民社会があったが、集団形態として見れば、国家と教会は *universitas* であり、市民社会は *societas* であった。この交錯する三勢力が中世から近世への変動の大きな要素であった。⁽²⁹⁾ 歴史の流れとして一旦は絶対主義の中央集権国家が成立したものの、その下において「かように市民社会は国家の発達に伴い、一方にその保護をうけ、一方ではその御用に奉仕しつゝその力を養ったのである。」が、その実態に関しては「蓋し市民社会の発達、都市的勢力の活躍といえ、都市において諸種のソキエタスが盛んに起り盛んに活動し、あらゆる社会関係がソキエタス化することに外ならぬ。」ととらえられる。こうした歴史的事実からも明らかなように、「各主体性を有する多数の個人の間に成立するかくの如き債権的諸関係の一総体、これが即ち市民社会の実体である。」⁽³⁰⁾と、近世市民社会の本質をとらえている。

このように、銅直教授は本論文においてローマ起源の *societas*、*universitas* 概念、ローマ時代の *societas* の意味についての L.Seneca の所説、*societas* 概念の歴史的展開、中世から近世への社会の歴史的展開の検討を経て、

societas 概念が近世社会概念と整合性を持つことを明らかにしている。その上で、次の課題として「かゝる市民社会の実体的発達の中から如何にして社会の概念が学的理論として成立したか、その展開しゆく学説の種々とその歴史的社会的思想的背景の解明、これを述べることは又他の機会に譲りたい。」⁽³¹⁾と、社会概念の検討とともに、社会学の成立に関しても解明すべきことが課題となると示している。

4) 「ローマ時代における社会 *societas* 概念の成立」論文における考察

第1論文「社会概念の市民的系譜」においてローマ起源の *societas* 概念の検討と近世にいたる社会概念の歴史的・概観的検討を行ない、第2論文「近世社会概念の成立序説」においてローマ時代から中世、近世にいたる社会の歴史的変動と社会概念の展開過程についてより詳細な検討を行なった銅直教授は、第2論文発表から12年後の1972年1月に、第3論文「ローマ時代における社会 *societas* 概念の成立」を日本大学社会学科五十周年記念論文集『現代社会と社会学』に発表した。

この論文の研究目的について銅直教授は、第2論文との関連を明確にした上で、「…(略)…再びソキエタス概念のローマ的起源を明にし、かつ社会学史上始めて社会 *Societas* について重要な論述をなしたキケロの業績を明にしたいと思う。」⁽³²⁾と示している。第2論文ではローマ時代における *societas* 概念についても考察されてはいるものの、その後の社会と社会概念の歴史的展開過程についての考察が主となっており、*societas* 概念そのものの考察が必ずしも十分ではなかったと考え、その点をさらに深く考察するとともに、その一環として M.T. Cicero (B. C. 106-43) の所論を考察することも意図しているのである。

銅直教授は、社会 society 概念は一般に市民社会の確立をもって定立したととらえられることが多いが、社会概念は決して市民社会の成立をまって初めて発見されたものではなく、より古い歴史的由来が存在すること、それを明らかにすることが必要であると、前第2論文と同じ基礎的な考え方に立つことを表明している。その上で、事実としての社会の存在と社会の認識の両側面に関して、「抑々人間はその発生以来孤独のものではなかった。本質的に人間が社会的なものであることは改めて説く必要はない。事実人間はその発生以来社会の中に生れ、そして生きて来たのであり、社会という事実は人間と共に始まっている。然し概念としての社会はそうではない。」⁽³³⁾と、両者を区別してとらえていく必要があるとの考え方を採ることを明示している。

このような基本的な考え方に立って、銅直教授はギリシャからヘレニズム、ローマ時代にいたる歴史に対して考察を加え、「遠く歴史を溯ってギリシャ時代を見るに、当時においてはポリスが人間生活集団として最高のものであり、ポリス以外に第三の集団形態が、それと相対立する位置を占めるものはなかった。それ故にポリス以外の他の集団形態が、新に独自のものとして成立するには、ポリスの全体的勢力そのものが解体しなければならなかった。ヘレニズムの時代は正しくこの時代であって、それは西洋文明における新しいいろいろの要素が生み出された時代であった。次いでローマ時代に入ると、こゝに新しい社会発展にともなって、始めて *societas* という特殊の社会的事実が発生し、かゝる社会的事実に対応して社会の理論が形成されるに至ったのである。」⁽³⁴⁾と社会の概念・社会に関する理論が、ローマ時代になって特殊の社会的事実の発生と相即する形で成立したことを指摘している。そして、その点に関して「私の

見るところによれば、ローマ時代にはローマ的社会概念が成立しキリスト教社会にはキリスト教的社会概念が成立していたのである。社会概念は決して近世市民社会特有のものではなかった。…(略)…このローマ的社会概念が歴史的に持続され、近世市民社会の中に引きつがれているのである。ラテン語の *societas* が *society*, *société* として近世市民社会概念として引きつがれているのは、そこに深い歴史的由来があるのである。」⁽³⁵⁾と、自らの考え方を歴史的実を指摘することに合わせて、再び展開させている。その上で、ローマ時代における *societas* が近世以降の市民社会概念の淵源であるとしても、それは同一のものでは決してなく、それ故に「然しいわゆる市民社会的概念の成立とは歴史的に直接に結びついているのではなく、このローマ的ソキエタスと近世市民社会概念とを直ちに類同することは出来ない。両者の関係を分析的に歴史的に解明すること、それがこの論文の目的である。」⁽³⁶⁾と、この論文におけるより具体的な研究目的が導き出されることを示している。

銅直教授は近世社会の成立には自由平等で主体的な個人の確立が不可欠の要件であり、そこにまた近世社会の本質が存在しているととらえている⁽³⁷⁾と理解されるが、歴史的に見るならば、こうした「…(略)…原子論的社会概念は、歴史的に発生し発達したものであって、社会的理論の上において、また歴史的実としては、初めはなお特殊的存在であった。」のであり、その特殊な *societas* の外に全体的な *universitas* があつたにもかかわらず、「それが如何にして共同社会的なる国家や都市や教会から独立してそれ自身を一つの特別な集団形態として見出すに至ったのであろうか。」⁽³⁸⁾と、自らが歴史的に考察すべき課題を提起している。

さらにより具体的に、「われわれが近世における社会概念の成立を明にしようとする時、先ずポリスの解体とヘレニズム世界における社会圏の拡大、次に来るローマの世界国家の成立とソキエタスの商業主義の発達、並にローマ時代の哲学思想や法律的観念とその背景をなす社会的経済的諸事情、更にキリスト教的個人主義的教説と世界主義的超国家的思想等、凡そそれらの連関について知ることが必要となるのである。」⁽³⁹⁾と、ローマの成立期から中世を経て近世にいたる歴史的考察の焦点を示している。

こうした自ら設定した課題に対して、銅直教授はローマの商業主義、ローマ法上におけるそれらの反映としての *societas* と *universitas*、さらにローマにおける商業主義とそれに含まれる個人主義と世界主義とストア思想との関連が *societas* の基盤をなしていることを明らかにしているが、これらについては前2論文においても簡単ではあっても触れられている点であって、本論文でさらに詳細・体系的な考察が加えられたものと理解される。それ故、ここではこれらについて詳説することは略させていただく。銅直教授はこれらの諸点に関して明らかにした上で、本論文の独自の考察の焦点であるローマ時代において一般的な通常用語としての *societas* が、今日用いられている *society* とほぼ同じ意味で用いられていたことを Cicero の所論の中に見出すという考察に進んでいる。

銅直教授は Cicero を取り上げた理由について「私見によればキケロは、社会というものについて、始めてこれを学説の上に取りあげた最初の人であろうと思うのである。」⁽⁴⁰⁾と説明しているが、このような認識を持っていたことは、銅直教授の Cicero の所説に関する考察を取り上げる前提として、また本稿の考察対象範囲をこえる課題であるが銅直教授の社会学観を明ら

かにする一端としてここで改めて確認しておく必要がある。

銅直教授はローマにおける *societas* 概念が法律的・経済的概念として用いられていたことが多く、一般的にはそのように理解されてきたとしても、「但しこの *societas* なる概念は、前に述べたように単に、法律的経済的概念としてのみ使用されたのではなかった。それはより一般的な通常用語として、われわれが今日使用している *society* と、略々同様な意味に用いられたことを知るのである。」⁽⁴¹⁾と、*societas* 概念の持つより一般的な「社会」としての意味の存在、そうした意味での使用があったことを指摘する。そしてその代表的な例として「われわれはそれを、当時の代表的な思想家キケロ Cicero のソキエタス論の中に見出すのである。」⁽⁴²⁾とCicero の所説の位置づけを明らかにして、その内容の検討に進んでいる。銅直教授は Cicero の『国家論』と『義務論』を取り上げ、Cicero は社会の成立を人間の本性から説明している、として、あらゆる生類は自己保存の本能を持っている、その中でも人間は理性を持ち未来の生活の準備をする、理性の力によって人と人を結びつける、人間は群をなして集まり集会を催さしめる、とその所説を要約紹介する。その上で、Cicero は人間生活の究極の目的を道德善であるとし、道德善には、1. 真実の完全なる認識、2. 人間の社会を維持し、人をしてその所を得しめ、その責務を忠実に果たすこと、3. 高邁不屈の精神、4. 節制と克己の根源たる秩序と中庸、の4形相があるが、この中で「秩序と中庸」が人間社会が相互的に維持される原理、生活共同体の原理であり、その中には、1. 正義、2. 博愛の二つが含まれている、と説明されていることを示している。さらに、他者にいかなる損害も与えないこと、共同の利益のために寄与することが、人類の社会

とその紐帯を維持するために必要である、と説明されていることも示している。しかし、銅直教授によってそれ以上に重要な指摘ととらえられているのは、「…（略）…人類の共同体 *communitas* と社会 *societas* との自然的原理は、更に深いところに求めなければならないとして、それを理性と言語に求める。」⁽⁴³⁾ という点であり、「それが教育、学習、伝達、討議、推理等の方法によって人と人との調和せしめ、一種の自然的社会関係によって結びあわせるのである。」⁽⁴⁴⁾ と具現化される方法についても説明されていることを指摘する。

このように Cicero の所説を明らかにし、検討を加えた上で、銅直教授は「以上によってわれわれは、キケロのいう社会 *societas* の本質は、個人対個人の give and take の関係であることを知る。この面が近世の個人主義的社会関係とつながっているのであるが、キケロにおいてはそれは人間生活の一部面にすぎなかった。*societas* は更により包括的な人類社会に連っているのである。然し重要なことは、キケロにおいては *societas* と人類の共同体 *communitas* とは国家 *civitas* によって媒介され、ソキエタスは国家の活動と本質的に結びついていることである。…（略）…然も前述によって知られるように、ソキエタスは、単に資本結合の形態としてだけではなく、法律上の地位を占め、又キケロにおけるように、それは明らかに一般的な社会関係形態として、今日われわれが使用している社会概念と、明らかに近似した性質をもっていたのである。然しキケロはローマの国家の将来になお望を捨てず、昔日の栄光の復活を願った。然しそれがセネカの時代になると国家の解体は最早時間の問題となり、セネカの *societas* 論にも大きな変化が生ずるのである。」⁽⁴⁵⁾ と総括し、次の時代への展開を示唆するのである。

Cicero の所説を検討することによって、ローマの *societas* 概念に今日の社会 *society* 概念と共通するものがあって、その起源と位置づけられること、しかしながらそれら両者は完全に一致するものではなく相違があることが結論づけられたと言って良い。

なお、ここまでの考察を終えた上で、銅直教授は残された研究課題について「ローマ時代におけるソキエタス概念については、キケロにつぐものとしてセネカがあり、更にキリスト教哲学者の中にアウグスチヌスとトマス・アキナスがある。ソキエタス論は大きな変転を見た。それについて述べる必要があるが、それはまた別の機会にゆずる。」⁽⁴⁶⁾ と示しているが、筆者の知る限り残念ながらこれに続く論文は発表されるにいたらなかった。

(6) *societas* の概念と近世「社会」概念についての検討

1) 先行研究との関連

以上、銅直教授のローマの *societas* 概念の検討を基礎として、それと近世以降の社会 *society* 概念との異同、その間の社会と社会概念の展開に関して明らかにした研究に関して検討してきたが、このテーマと共通する数少ない先行研究として銅直教授は福田徳三著『社会政策と階級闘争』（1922年刊、第1章「社会の発見」）、高田保馬著『社会と国家』（1922年刊）、新明正道『社会學の發端』（1947年刊、第2章「近代自然法における社会學」）を上げている。

これらの先行研究の中で銅直教授が「次に新明正道著『社会学の發端』（昭和廿二年刊）は社会学の成立並に社会概念の構成について示唆多い著作である。博士は近代自然法をもって、もっとも早く社会の概念的明確さを示唆した点において社会学の發達を内蔵するものと述べて

いる。」⁽⁴⁷⁾と評価している、新明正道の『社會學の發端』を見ると、「近代における社會 (society, société, Gesellschaft) の概念は語源的には、ラテンのソキエタス (societas) から發してゐる。ソキエタスは單にソキイ (socii) を總稱する集合名詞、契約當事者として對立する自然人の自由な契約關係を意味するものであった。このソキエタスは自然發生的な意味を離れた社會の概念であつて、未だ一般的な社會の概念とは成つてゐなかつた。」⁽⁴⁸⁾とローマ時代の societas 概念、言わばその原義をとらえたうえで、「…(略)…十七世紀以後の…(略)…一般的な傾向としては、俗世化的傾向と個人主義的傾向が益々有力と成りつゝあつた。前期の身分的な社會の概念はこれによって著しく變改せられ、社會は完全に個人を單位として成立したものと考へられ、契約の主體も亦個人と成るにいたる。この時期において社會の概念の形成が一層明瞭に成つたことは否定すべくもない。…(略)…かくしてローマ的なソキエタスの概念は純粹な形式概念として普遍的な支配を獲得するにいたつたのである。」⁽⁴⁹⁾と、より一般的な社会概念への展開を明らかにし、「…(略)…この簡単な考察によつても、近代自然法論の殆どすべての體系が社會の概念と接觸するものを有し、持續的にこれを明確にして來たことが認められるのである。この社會概念は根本的にはソキエタスの名稱を旗幟として發展して來たものである。このローマ的なソキエタスは幾變轉を経て現代のソサイチーにまで續いてゐるものであつて、その歴史のなかに社會の概念の全歴史が含まれてゐるわけである。そして、この全歴史において近代自然法論が鍵鑰的な地位に立つてゐることは明かである。」⁽⁵⁰⁾と結論づけている。新明正道のこの考え方はこの著書に先立って刊行された『社會學の基礎問題』(1939年刊)でも、「社會の概念は社會學の起源の問題と結

びついて屢々これまで論議されて來たものである。私は社會が問題として生起するにいたつた時代を近代の初頭にあると考へ、その萌芽的な理論として自然法學者の提示した思想を重視するものである。…(略)…今日の社會に該當する概念は早くからソキエタス societas の概念として自然法理論のなかに現れつゝあつたが、國家とともに、否最後には國家を基礎づけるものとして、此の社會の意義は漸次強調されるやうに成つた。」⁽⁵¹⁾と指摘されていたのである。

先行研究である新明の研究との關係については、銅直教授の研究の基本的な方向、その基礎となつた考え方は、新明の考え方と基本的に共通するものであるが、新明が指摘した事實を出発点とし、ローマの societas 概念、それと近世以降の社会 society 概念との異同、その間の社会と社会概念の展開に関して詳細に文献研究を通じて明らかにしているととらえることができる。この点からは、銅直教授の研究は先行研究を正当に継承し、その上でさらに一步知見を進めるという、研究の基本的態度をふまえ、さらなる成果を上げたものと評価することができる。

2) 銅直教授の societas 概念と近世「社会」概念についての研究

以上、銅直教授のローマの societas 概念、それと近世以降の社会 society 概念との異同、その間の社会と社会概念の展開についての研究に関して考察してきたが、この研究は今日の時点において、次のように評価できると考える。

第1に、銅直教授は第2論文の中で、Stuckenberg の「然しながら社会という語の正確な意味を知り、又よくその豊富な内容を明らかにするためには、その語源の究明や、通例その語に結びついている意味や、又現存する諸社会そのものに助けを得ることができる…(略)

…」⁽⁵²⁾という考え方を紹介し、その研究を先行研究の一つとして取り上げている。この考え方は銅直教授の本3論文に結実した研究に対する評価としてもあてはまるものであり、社会概念をその語源、原義から明らかにしようとした点において独自の研究視角を持った類例の少ない研究であると考えられる。

第2に、これら3論文の研究結果を見るならば、1. ローマの *societas* 概念に一般的な「社会」の意味が含まれており、自由平等な個人間の関係を基礎として成立するという点で近世以降の社会概念に共通する要素も持ち、近世以降の社会概念の起源と考えられることを明らかにした、2. しかし、ローマの *societas* 概念と近世以降の社会概念の間には相違点もあることを踏まえ、*societas* 概念がローマ時代以降、社会の実態の変化とも対応して変化していること、そしてローマ時代から中世、近世、ひいては近代にいたる、その変化の実態を明らかにした点で、独創的な研究成果を上げたと考えられる。

第3に、先行研究の知見をふまつつも、そのより詳細で実証的な解明を成し遂げ、研究をさらに前進させたと考えられる。

第4に、自ら示している残された課題とは別に、著者は残された課題として、ローマ時代において *societas* とともに、より全体性の強い概念として存在した *universitas* 概念が、その後いかなる変遷を経たのか、近世以降の時代にそれを継承する存在が見出しているのか、*Gemeinschaft* 的概念との関連・異同も含めてさらに詳細に検討する必要があるのではないかと考える。

以上、残された課題はあろうとも、銅直教授の本3論文に結実した研究は前稿で検討を加えた中国の古典に「社」「会」「社会」の原義を求める研究とあいまって、独自の研究視角を持ち、

類例が少なく、今日においてもなお同種のより詳細な研究を見ることの困難な貴重な研究として高く評価することができる。

おわりに

以上、銅直教授の社会学について主として3つの焦点から紹介し、検討を加えてきたが、銅直教授のきわめて広範に及ぶ研究領域・成果からすれば、限られた一部分を取り上げたにすぎない。社会史的研究については全く触れることができなかったし、社会学研究の中でも *E. Durkheim* に代表されるフランス社会学史・社会学理論の研究、さらには警世の書としても読ませていただくことのできる文明論など取り上げるべき課題が多く残されていることは十分承知している。しかし、浅学非才の著者の手には余りある内容でもあり、4回をもって一応今回の一連の論稿を閉じさせていただき、他日を期したい。ご子息、銅直健様をはじめとして、松本和良先生など多くの資料をご提供いただき、ご教示賜った方々に心から御礼を申し上げる。

最後に著者が懸念するのは、銅直教授の社会学について誤った理解をし、誤った記述をしているのではないかと言う点である。この点に関連して、銅直教授が米田庄太郎博士の社会学について論じた論文の中に示された言葉を再び掲げさせていただきたい。銅直教授と我が身を比すことの僭越であることは十分承知しているが、この言葉をもって自戒の意を表させていただくこととしたい。

終りにのぞみ、私の記述が記して足らず、伝えて誤りを犯したことなきやを疑う。今はただ先生がその多年の努力を以って純正社会学の創建に苦心を尽くされたことをここに叙して、師恩に対する私の微意の一端を表明するに止める⁽⁵³⁾。

〔注〕

- (1) 銅直勇「社会概念の市民的系譜」(『社会学論叢』創刊号、1953年、所収) 2頁
 (「社会概念の市民的系譜」論文については、銅直教授が自ら所蔵しており、後に明星大学に寄贈された『社会学論叢』創刊号のコピーから引用したが、銅直教授自身の手で若干訂正が加えられており、ここでは訂正されたものを引用した。それ故、引用文と誌上に掲載された文章との間には細部において異なる点があることを付記する。)
- (2) 同上 2頁
 (3) 同上 2頁
 (4) 同上 2～3頁
 (5) 同上 3頁
 (6) 同上 4頁
 (7) 同上 4頁
 (8) 同上 4頁
 (9) 同上 5頁
 (10) 同上 5～6頁
 (11) 同上 6頁
 (12) 同上 6頁
 (13) 同上 6頁
 (14) 同上 6頁
 (15) 同上 6～7頁
 (16) 同上 7頁
 (17) 同上 7頁
 (18) 同上 7頁
 (19) 銅直勇「近世社会概念の成立序説－社会概念の原初形態－」(『日本大学創立七十周年記念論文集』1960年、所収) 865頁
 (20) 同上 865頁
 (21) 同上 867～868頁
 (22) 同上 870頁
 (23) 同上 873頁
 (24) 同上 878～879頁
 (25) 同上 885～886頁
 (26) なお、銅直教授は人間の一般的社会性の最も形式的に現れたものが「社交」であるとして、G.Simmelの「社交」(Die Geselligkeit) に関しても考察を展開しているが、ここではその詳説は省略させていただきたい。
 (27) 銅直勇 前出 (1960年) 893頁
 (28) 同上 896～897頁
 (29) 同上 898頁
 (30) 同上 899頁
 (31) 同上 899頁
 (32) 銅直勇「ローマ時代における社会 *societas* 概念の成立」(『現代社会と社会学 (日本大学社会学科五十周年記念論文集)』1972年1月、所収) 1頁
 (33) 同上 2頁
 (34) 同上 2頁
 (35) 同上 2頁
 (36) 同上 4頁
 (37) 同上 4頁
 (38) 同上 4頁
 (39) 同上 8頁
 (40) 同上 14頁
 (41) 同上 13頁
 (42) 同上 13頁
 (43) 同上 15頁
 (44) 同上 15頁
 (45) 同上 15～16頁
 (46) 同上 16頁
 (47) 銅直勇 前出 (1960年) 866頁
 (48) 新明正道『社会学の發端』1947年、54頁
 (49) 同上 68頁
 (50) 同上 82頁
 (51) 新明正道『社会学の基礎問題』1939年、201頁
 (52) 銅直勇 前出 (1960年) 874頁
 (53) 銅直勇「米田庄太郎博士の『純正社会学』」(日本社会学会編『社会学評論』第55号、

1964年、所収) 61頁

〔参考文献〕

銅直勇「新著紹介 社會學原理 高田保馬著」
(『哲學研究』第69号、1921年、京都哲學會、所収)

銅直勇「社會の概念」(『哲學研究』第80号、1922年、京都哲學會、所収)

銅直勇『純正社會學概論』1929年、玉川学園出版部

銅直勇「社会概念の市民的系譜」(『社会学論叢』創刊号、1953年、日本大学社会学科、所収)

銅直勇「中国における『社會』の意義」(『社会学論叢』第4号、1956年、日本大学社会学科、所収)

銅直勇『『社会』続考』(『日本大学研究年報』第7号第2分冊、1957年、日本大学、所収)

銅直勇「近世社会概念の成立序説—社会概念の原初形態」(『日本大学創立70周年記念論文集』1960年、日本大学、所収)

銅直勇「米田庄太郎博士の『純正社会学』」(『社会学評論』第55号、1964年、日本社会学会、所収)

銅直勇『社会学(上)』1966年、明星大学

銅直勇「ローマ時代における社会 Societas 概念の成立」(『現代社会と社会学—日本大学社会学科創立50周年記念論文集』1972年、日本大学社会学科、所収)

銅直勇『銅直勇著作集』1977年、めいせい出版

馬場明男「銅直勇著『純正社會學概論』」(書評)
(『社會學徒』第5巻第3号、1931年、社會學徒社、所収)

『明星大学社会学科研究報告』第12集(銅直勇先生追悼記念論文集)1980年、明星大学人文学部社会学科

三好豊太郎「銅直勇先生を偲んで」(『明星大学社

会学科研究報告』第12集、1980年、明星大学人文学部社会学科、所収)

高島秀樹「銅直勇」(川合隆男・竹村英樹編『近代日本社会学者小伝』1998年、勁草書房、所収)

田野崎昭夫「日本の講壇社会学の確立期をめぐる若干の考察」(『中央大学文学部社会学科紀要』7、1997年、中央大学文学部社会学科、所収)

小笠原真「米田庄太郎の社会学体系について—日本社会学史の一駒」(『龍谷大学社会学部紀要』11、1997年、龍谷大学社会学部、所収)

水谷史男「米田庄太郎」(川合隆男・竹村英樹編『近代日本社会学者小伝』1998年、勁草書房、所収)

中久郎編著『米田庄太郎の社会学』1998年、いなほ書房

小笠原真『日本社会学史への誘い』2000年、世界思想社

中久郎『米田庄太郎—新総合社会学の先駆者』(シリーズ世界の社会学日本の社会学)2002年、東信堂

高田保馬『社會學原理』1919年、岩波書店

高田保馬『社會學概論』1922年、岩波書店

高田保馬『社會關係の研究』1926年、岩波書店

高田保馬博士追想録刊行会編『高田保馬博士の生涯と学説』1981年、創文社

福武直「日本社会学」「高田保馬」(阿閉吉男・内藤莞爾編『社會學史概論』1957年、勁草書房、所収)

福武直「高田保馬」(福武直・日高六郎・高橋徹編『社会学辞典』1958年、有斐閣、所収)

居安正「高田保馬」(森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』1993年、有斐閣、所収)

稲上毅「高田保馬『社会学原理』」(見田宗介他編『社会学文献事典』1998年、弘文堂、所収)

川合隆男「高田保馬」(川合隆男・竹村英樹編

『近代日本社会学者小伝』1998年、勁草書房、所収)

菊池寛『恩讐の彼方に』1919年、(ここでは菊池寛『藤十郎の恋 恩讐の彼方に』新潮文庫版、1970年、を利用した)

浦川源吾「社及社會考(一)」「社及社會考(二)」(『哲學研究』第77・78号、1922年8・9月、京都哲學會、所収)

新明正道『社會學の基礎問題』1939年、弘文堂書房

内田銀藏『日本國民生活の發達』1941年、大阪創元社

加藤常賢「書社及社考 併せて助・徹の名義に及ぶ」(『年報社會學』9、1943年、日本社會學會、所収)

新明正道『社會學の發端』1947年、有恒社

蔵内數太『社會學概論』1953年、培風館

福武直「社会」(福武直・日高六郎・高橋徹編『社会学辞典』1958年、有斐閣、所収)

曾我部静雄「社会という語の意味」(『文化』第26巻第1号、1962年、東北大学文科会、所収)

松本和良「〈ソキエタス〉と〈コミュニタス〉—両者の一般概念図式への関連について—」(『新潟大学人文科学研究』第65輯、1984年、新潟大学、所収)

三溝信「社会の概念と社会学」(北川隆吉編『現代社会学辞典』1984年、有信堂高文社、所収)

塩原勉「社会」(森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』1993年、有斐閣、所収)

(たかしま ひでき、本学科教授)